

初期近代英語における迂言的 do

の発達に関する一考察

～Shakespeare におけるデータを中心として～

古 庄 信

ME から初期近代英語にかけての肯定文、否定文、疑問文、命令文などの各文中の助動詞 do の発達については、すでに Sweet, Mätzner, Jespersenをはじめ、Ellegård, Visser など多くの研究が有名であるが、特に Ellegård による研究 (*The Auxiliary Do*. 1953) は、その膨大なデータをもとに、かなり鮮明かつ具体的に各時代の do の発達状況を提示した、という点で大きく評価されるように思われる。その Ellegård によると、各文における do の発達状況は次のようである。

すなわち、1500年代から1700年代にかけて、否定疑問文や肯定疑問文では do は、ほぼ順調に発達し、1600年代で70～80%ほどの普及率であるのに対し、否定平叙文や否定命令文では、同じ1600年代にわずか30%前後しか普及していない。さらに肯定平叙文における do にいたっては、1500年代半ばをピークとして衰退の一途を辿っている⁽¹⁾。問題は、なぜ do の発達が各文において、このように異なっているのか、ということであるが、これについての細部に渡る完全な究明は、現在のところも行われていないように思われる。

OED によると迂言的 do は元々 OE の肯定平叙文や命令文中にその起源を見ることが出来るとされている。

Æftre ðæm hie *dydon* azper ze cyninga ricu settan ze niwu
ceastra timbredon. (Orosius. I. x. sec. 5)⁽²⁾

しかし、Ellegård は、これらは causative 即ち使役的な do であり、純粹な迂言的 do が現れるのは、この使役の意味が失われたあと、即ち ME に

なっているからである、としている。⁽³⁾

さらに、否定文や疑問文における *do* が出現したのは、Chaucer に見られるように ME 以降であると、OED は指摘している。⁽⁴⁾

Fader why *do* ye wepe? (Monk's Tale)

このような起源の問題については今後の大きな課題として、ひとまず置いて、今回はその後の発達の途上における *do* の問題点について考える。

さて前述したとおり、これらの *do* は16世紀以降、Ellegård のグラフからも明らかなように、否定疑問文、次に肯定疑問文、否定平叙文、否定命令文の順に発達しているが、このように各文における *do* の発達状況が異なるという問題を考える上で、Ellegård のデータだけでなく、実際に各文における *do* の発達状況の差がもっとも大きく現れた1600年代ごろのデータ⁽⁵⁾を実際に収集して、Ellegård のデータと比較してみることで何かしらの手がかりが得られないかということが考えられた。

そこで作品の量が比較的豊富であり、コンコードダンスを使用することでデータも得やすい、Shakespeare をテキストに選んだ。

作品の選択に当たっては、韻文の部分は、*do* が韻律の影響を受けていることを考慮して、用例は収集したが、*do* の分布状況に関する判断の対象からは除外した。このため、できるだけ多くのデータが得られるように散文の多い作品を優先的に選択した。⁽⁶⁾

また作品数については、時間の許すかぎり、多くの作品を扱うようにしたが、今回はこれまでの時間のつごうで、喜劇5作品、悲劇7作品、史劇3作品、ロマンス劇3作品からデータを収集した。各作品は次のとおり。

Much Ado About Nothing (以下 Ado), *All's Well That Ends Well* (以下 All), *As You Like It* (以下 AYL), *The Merry Wives of Windsor* (以下 MW), *Twelfth Night* (以下 TN), *Hamlet* (Ham), *Othello* (Oth), *King Lear* (以下 Lea), *Macbeth* (以下 Mac), *Timon of Athens* (以下 Tim), *The 1st Part of King Henry IV* (以下 1H4), *The 2nd Part of King Henry IV* (以下 2H4), *The Life of King Henry V* (以下 H5), *Pericles* (以下 Per), *The Winter's*

Tale (以下 WT), *The Tempest* (以下 Tem).

テキストは、Riverside 版⁽⁷⁾を用い、同時に明星大学および雄松堂出版の First Folio を参考⁽⁸⁾に、またコンコーダンスは Spevac の *The Harvard Concordance* ⁽⁹⁾を使用した。

分類の方法については Ellegård にしたがって I. 否定疑問文(以下 NQ) II. 肯定疑問文 (AfQ), III. 否定平叙文 (ND), IV. 否定命令文 (NI), V. 肯定平叙文 (AD) の 5 種類に、また、肯定疑問文については、さらに、これも Ellegård にしたがって、1. Yes-no を答に要求する Verb Question, (以下 VQ と省略。) 2. When, why, how といった副詞的な疑問詞をもつ Adverb Question, (以下 AQ), 3. What を疑問詞にもつ Object-Question (以下 OQ) の 3 タイプに分類した。このような観察の結果、次のようなデータが得られた。

I. NQ における do.

表 1

	comedies	tragedies	histories	romances	total
P. do NQ	28	8	10	3	49
P. S NQ	15	3	5	5	28
do/S	(65.1%)	(72.7%)	(66.7%)	(37.5%)	(63.6%)

表において明らかなようにロマンス劇以外は do が60~70%の割合で普及している。各々の例は次のとおりである。

do NQ: ▲ Did he make you laugh? (Ado. 2. 1. 120) ▲ Didst thou not see the paddle with the palm of his hand? (Oth. 2. 1. 249) ▲ doth not the King lack subjects? (2H4. 1. 2. 73) ▲ Do you not hear me speak? (Tem. 2. 1. 210)

S NQ: ▲ Knows he not thy voice? (All. 4. 1. 8) ▲ Wrought he not well that painted it? (Tim. 1. 1. 196) ▲ have I not all their letters?

(1H4.2.3.26) ▲ Seest thou not the air of the court...? (Win. 4. 4.731)

II. AfQ における do

表 2

	comedies	tragedies	histories	romances	total
P. do AfQ	105	85	42	18	250
P. S AfQ	108	80	76	21	285
do/S	(49.3%)	(51.5%)	(35.6%)	(46.1%)	(39.4%)

平均値は39.4%となっているが、歴史劇を除けば各々50%近い普及率であるといえる。各例は次の VQ, AQ, OQ において見ることにする。

1. VQ における do

表 3

	comedies	tragedies	histories	romances	total
P. do VQ	71	52	28	15	166
P. S VQ	38	26	32	9	105
do/S	(65.1%)	(66.7%)	(46.7%)	(62.5%)	(61.3%)

上の表に見られるように、史劇において若干Sタイプの方が上回っているが、他はすべて do タイプが60%前後の割合で普及していることがわかる。

do VQ: ▲ But didst thou hear without wondering...? (AYL. 3.2.164) ▲
Do they hold the same estimation they did...? (Ham. 2.2.327) ▲
Do you think I'll be forsworn? (H 5.4.8.12) ▲ Doth thy other
mouth call me? (Tem. 2.2.98)

S VQ: ▲ Hath the fellow any wit...? (Ado. 1.2.15) ▲ Had he a hand
to write this? (Lea. 1.2.55) ▲ See you these clothes? (Win. 5.2.
130) ▲ Calls my lord? (Per. 5.1.181)

2. AQ における do

表 4

	comedies	tragedies	histories	romances	total
P. do AQ	16	17	2	3	38
P. S AQ	44	29	15	4	92
do/S	(22.9%)	(36.9%)	(11.8%)	(42.9%)	(29.2%)

前述の VQ と比べるとここでは、同じ疑問文でありながら、total で 3 割未満とかなり低い普及率であることがわかる。各例は次のとおり。

do AQ: ▲ Why do your dogs bark so? (MW. 1.1.258) ▲ How doth pride grow? (Tro. 2.3.147) ▲ Why dost thou converse with that trunk of humors,...? (1H4.2.4.448) ▲ How didst thou scape? (Tem. 2.2.119)

S AQ: ▲ How called you the man you speak of, madam? (All. 1.1.22) ▲ When saw you my father last? (Lea. 1.2.147) ▲ Where lay the King to-night? (2H4.2.1.168) ▲ Why lament you, pretty one? (Per. 4.2.68)

3. OQ における do

表 5

	comedies	tragedies	histories	romances	total
P. do OQ	5	16	9	0	30
P. S OQ	36	25	31	7	99
do/S	(12.2%)	(39.0%)	(22.5%)	(/)	(23.3%)

最高でも悲劇の39%，ロマンス劇では do の例皆無，平均で23.3%と OQ よりさらに低い使用率であることがわかる。各々の例は次のとおり。

do OQ: ▲ What dost thou mean? (TN. 1.3.117) ▲ What do you read,

my lord? (Ham. 2.2.190) ▲ What didst thou lose, Jack? (1H4.3.3.100)

S OQ: ▲ What think'st thou? (Ado. 5.1.117) ▲ What says the fellow there? (Lea. 1.4.45) ▲ What disease hast thou? (2H4.3.2.180)
▲ What advocate hast thou to him? (Win. 4.4.740)

Ⅲ. ND における do

表 6

	comedies	tragedies	histories	romances	total
P. do ND	40	9	29	4	82
P. S ND	102	75	29	18	256
do/S	(28.1%)	(10.7%)	(32.2%)	(18.2%)	(24.3%)

表からわかるとうり、喜劇では5作品中40例の do が見られるが、悲劇は7作品からデータを集めたにもかかわらず9例、またロマンス劇では3作品中わずかに3例と、ジャンル別による do の分布のかたよりがあるように思われる。各例は次のとおり。

do ND: ▲ I do not think the knight would offer it, (MW. 2.1.155) ▲ For my part, I do not lie in't,... (Ham. 5.1.116) ▲ I do not know dat. (H5.5.2.211) ▲ Therefore they do not give us the lie. (Win. 4.4.726)

S ND: ▲ I care not for my spirits... (AYL. 2.4.2) ▲ it appears not which of the dukes he values most, (Lea. 1.1.4) ▲ but I mark't not... (1H4.1.2.85) ▲ I know not where to hide my head (Tem. 2.2.22)

Ⅳ. NI における do

表 7

	comedies	tragedies	histories	romances	total
P. do NI	11	8	7	3	29
P. S NI	41	31	11	8	91
do/S	(20.0%)	(20.5%)	(38.9%)	(27.3%)	(22.8%)

史劇における do だけが18例中7例、と高い頻度を示しているが、全体では20%をやや上回る程度である。ここでも ND の場合と同様、do タイプの普及率は低いように思われる。

do NI: ▲ do not think I have wit. (TN. 2.3.125) ▲ Do not learn of him, Emilia (Oth. 2.1.160) ▲ Do not you grieve at this. (2H4.5.76) ▲ Prithee do not turn me about, ... (Tem. 2.2.11)

S NI: ▲ and let not him speak neither. (Ado. 2.1.279) ▲ Let her not walk i'th sun. (Ham. 2.2.184) ▲ Fear not your advancements, (2H4.5.5.78) ▲ To cabin! silence! trouble us not. (Tem. 1.1.18)

Ⅴ. AD における do

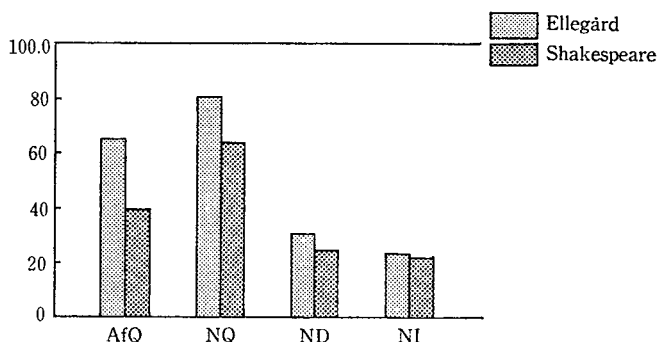
散文の肯定平叙文における do の用例は喜劇5作品中85例、悲劇7作品中30例、史劇、ロマンス劇各3作品中66例、合計で181例が見られる。これらの例が迂言的に用いられたのか、あるいは現代英語で残っている強意の用法として用いられたのかを文脈から判断することは、荒木氏が述べておられるように困難であるように思われる。この肯定文における do については今回はこれ以上触れないこととする。

このように各作品、ジャンル別に見た数値は、かなりまちまちで差がある。そこで各ジャンルを合計した total の平均値を再度整理してみるならば、その数値は次のようであった。

まず、AfQ における do が39.4%, VQ では61.3%, AQ では29.2%,

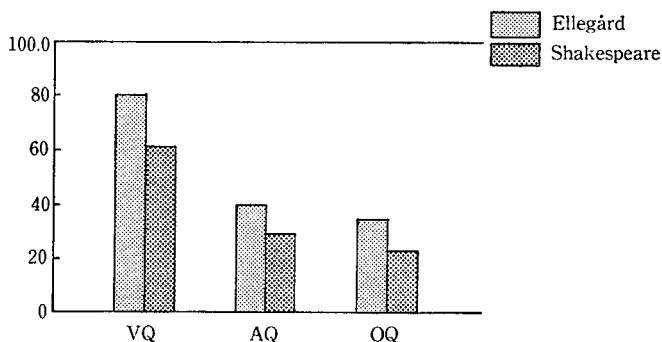
Ellegård/Shakespeare の肯定疑問文・否定疑問文・
否定平叙文・否定命令文における do の分布 1

表 8



Ellegård/Shakespeare の V/A/O Question における
do の分布 2

表 9



このように Shakespeare の数値と Ellegård のグラフにおける数値とを比較してみると、全体的に Shakespeare における do の使用率が低いことがわかる。

ND, NI については, Shakespeare も Ellegård もほぼ同じ数値であるが, NQ, AfQ に関しては, Ellegård のデータより約 20 % 近く低い数値が出た。

最初に述べたように, ジャンル別の作品数が異なっており, これがこのよ

OQ では23.3%となっている。次に ND では 24.3%, NI では22.3%, NQ^(a)では63.6%という数値が得られた。このデータをもとに Ellegård のグラフにおける Shakespeare とほぼ同年代の1600年代の数値を棒グラフによって比較してみると次のようである。

うな数値を生む可能性もあるかと思われた。そこで、念のため史劇、ロマンス劇の作品数にあわせて、喜劇、悲劇から散文の多い順に作品だけを選んで、史劇、ロマンス劇各3作品ずつのデータを取り直してみたところ、AfQ では46.2%とやや数値的に上がったものの、VQ では62.6%, AQ では30.8%, OQ で23.5%と、作品数の異なる場合の数値と大勢はほとんど変わらないという結果が出た。また否定文については、ND で21.9%, NI で30.0%,

表9 喜劇5・悲劇7・史劇3・ロマン劇3からのデータ(A)と喜劇3・悲劇3・史劇3・ロマン劇3からのデータ(B)の比較

	total (A)	total (B)
P. do AfQ	250 (39.4%)	181 (46.2%)
P. S AfO	285	211
P. do VQ	166 (61.3%)	124 (62.6%)
P. S VQ	105	74
P. do AQ	38 (29.2%)	28 (30.8%)
P. S AQ	92	63
P. do OQ	30 (23.3%)	23 (23.5%)
P. S OQ	99	75

P. do ND	82 (24.3%)	53 (21.9%)
P. S ND	256	189
P. do NI	29 (22.3%)	18 (30.0%)
P. S NI	91	42
P. do NQ	49 (63.6%)	30 (50.0%)
P. S NQ	28	30

NQ では50.0%と、さらに低い数値が出た。

このように Ellegård のデータと比較すると、Shakespeareが do を控えめに用いているように思われるが、中でも、依然として NQ, AfQ における do が他の文におけるよりも多く、また同じ AfQ でも、VQ に対して AQ, OQ ではかなり do の現れ方が異なる、という事実は Ellegård のグラフが示している結果と同じであるように思われる。

まとめ

そこで、もう一度問題点を確認すると、ひとつは同じ否定文でありながらなぜ ND や NI よりも NQ において高い頻度で do が用いられるのか、もう一つは、同じ AfQ でも、VQ と AQ, OQ ではなぜ do の現れ方が異なるのか、という2点が浮き彫りにされるように思われる。

NQ において do がもっとも多く現れる、という点については Jespersen も指摘しているように語順⁶³の影響があると思われる。すなわち ME まで、

V—S—not～？ または V—not—S～？

であったものが、SはVの前に置かれねばならない、という言語の普遍的傾向に影響を受けて、ME の終わりごろから

Do—S—not—V～？⁶⁴ または Do—not—S—V～？

のように、S—V の語順を保つために、do-support を必要とするようになった、これが、NQ において do が急成長した理由ではないか、ということである。

それに対して、ND やNI ではもともと、S—V—not のように、S—V の語順が確保されていたので、NQ における V—S といった語順転倒による違

和感が感じられなかったため、do の普及が遅れたのではないかということが考えられる。

Ellegård 自身は否定文全体における do の発達について、ME の ne の消失による文のアンバランスから do が発達したとして、同様のことを次のように指摘している。

Towards the end of the 15th c, when *en* had almost disappeared, *not* was generally unstressed. Under the circumstances its position after the main verb became anomaly... In the negative sentence, do-form allowed the word order to remain normal, whereas, the simple form came to appear as abnormal...⁶⁹

次に AfQ における、VQ と AQ, OQ における do の発達の違いについてであるが、VQ は前述の NQ の場合と同様、語順の影響で NQ における do の発達に引っ張られるようにして、do が発達したと考えられるが、AQ や OQ ではなぜこの do の発達が遅れたのであろうか。

Ellegård も、この点については、明確に理由を述べてはいないように思われる。⁶⁹しかし、VQ と AQ, OQ 両者の明確な違いは wh~ の疑問詞があるか否か、ということであり、この点に注目するならば、wh~ 疑問詞が何らかの原因で do の発達にブレーキをかけていたのではないか、ということが考えられる。

ただし、今回集めたデータや Ellegård らの研究だけでは、これらの結論を導き出すには、やや早急であるように思われる。今後のより豊富なデータの収集により、さらに明確な原因を追及していきたい。また今回は触れなかったが、英語が様々な面において1600年代という、まさしく変化の真っ只中にあった時期だけでなく、それ以前の変化をし始めた1400年代から1500年代にかけて、また do だけに限らず他の助動詞の発達との関連も含めて調査の枠を広げていくことを今後の課題としたい。

註

- (1) Ellegård, A. p. 162.

- (2) OED do 25a.
 (8) Ellegård, A. p. 155.
 (4) OED do 26-27.
 (5) Ellegård, A. p. 162.
 (6) Harbage, A. p. 31.
 (7) *The Riverside Shakespeare* 2vols. (1974).
 (8) *Mr. William Shakespeare's Comedies, Histories, Romances & Tragedies*.
 明星大学出版部 (1963).
 (9) *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Marvin Spevack. (1973).
 (10) 「シェイクスピアの発音と文法」 p. 70 荒木一雄・中尾祐治 (1980).
 (11) Ellegård, A. p. 162.
 (12) 拙稿 p. 9, 表9および付録表10。
 (13) Jespersen, O. MEG. V. 25.72.
 (14) OED do 28-29: It says this was the normal order until 16th c.
 (15) Ellegård, A. p. 209.
 (16) Ellegård, A. pp. 204-5.

表10 Shakespeare 疑問文・否定文 po の分布状況(各3作品ずつのデータによる)

	comedies	tragedies	histories	romances	total
P. do AfQ	64	57	42	18	181
P. S AfQ	65	49	76	21	211
do/S	(49.6%)	(53.8%)	(35.6%)	(46.1%)	(46.2%)
P. do VQ	47	34	28	15	124
P. S VQ	20	13	32	9	74
do/S	(70.1%)	(72.3%)	(56.0%)	(62.5%)	(62.6%)
P. do AQ	10	13	2	3	28
P. S AQ	25	19	15	4	63
do/S	(28.6%)	(40.6%)	(11.8%)	(42.9%)	(30.8%)
P. do OQ	4	10	9	0	23
P. S OQ	20	17	31	7	75
do/S	(16.7%)	(37.0%)	(22.5%)	(/)	(23.5%)

P. do ND	15	5	29	4	53
P. S ND	61	49	61	18	189
do/S	(19.7%)	(9.3%)	(32.2%)	(18.2%)	(21.9%)
P. do NI	4	4	7	3	18
P. S NI	21	2	11	8	42
do/S	(16.0%)	(66.7%)	(38.9%)	(27.3%)	(30.0%)
P. do NQ	13	4	10	3	30
P. S NQ	4	16	5	* 5	30
do/S	(76.5%)	(20.0%)	(66.7%)	(37.5%)	(50.0%)

参考文献

- Abbott, E.A. 1884. *A Shakespearian Grammar* (reprint) 1954. Senjo.
- Araki, K. 1980. 「シェイクスピアの発音と文法」 (中尾祐治共著) 荒竹出版
 ——1984. 「英語史ⅢA」東京:大修館
- Curme, G.O. 1931. *Syntax* Boston: Heath.
- Ellegård, A. 1953. *The Auxiliary Do*. Stockholm: Almqvist & Wilsell.
- Franz, W. 1934. *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa*. Halle: Niemeyer.
- Jespersen, O. 1909-49. *Modern English Grammar*. 7vols. London & Copenhagen: Allen & Unwin, and Munksgaard.
 ——1966. *Negation in English and other Languages*. Copenhagen Munksgaard.
- Mätzner, E. 1874. *An English Grammar* tr. by V.J. Grece repr. 1962.
- Mitchell, B. 1964. *A Guid to Old English*. Oxford: Blackwell.
- Mustanoja, T.F. 1960. *A Middle English Syntax I*. Helsinki:
- Nakao, T. 1972. 「英語史Ⅱ」東京:大修館
- Onions, C.T. 1975. *A Shakespeare Glossary* Oxford Univ. Press. (紀伊国屋書店)
- Sweet, H. 1891. *New English Grammar*. Oxford.
The Oxford English Dictionary (OED)

- Visser, F. Th. 1963-73. *An Historical Syntax of the English Language*. 4vols. Leiden : Brill.
- G. Evans, Blakemore 1974. *The Riverside Shakespeare* 2vols. Boston : Houghton Mifflin.
- Harbage, A. 1969. *William Shakespeare The Complete Works*. New York : The Viking Press.
- Mr. William Shakespeare's Comedies, Histories, Romances & Tragedies*. 1623.
(明星大学出版部・雄松堂 1985)
- Furusho, M. 1987. *A Historical Study of Periphrastic Do in the Shakespeare's Comedies*. (九州女学院短期大学学術紀要第12号)
- 1988. *A Historical Study of Periphrastic Do in the Shakespeare's Tragedies*. (九州女学院短期大学学術紀要第13号)
- 1989. *A Historical Study of Periphrastic Do in the Shakespeare's Histories and Romances*. (九州女学院短期大学学術紀要第14号)
- (本学助教授・ふるしょう まこと)